

に備へなければならぬと思ふのであります。

如何に健全なる宗教的精神と其の生活態度が戦争の聖なる目的完遂の爲の推進力となるかを考へるならば、又長い戦ひの後、社會人心の飢渴を癒すのは、何人の手に依つてなされるかと云ふ事に思ひを潜めるならば、私共の人生に果せられた任務と仕事の重大性は、自づと明らかにされると思はれます。

私の茶道観

中村貫一

茶道に入つて問のない自分が、茶道を論ずると言ふ事は僭越であるかも知れない。しかし好きな道を論ずると云ふ事は、別に悪い事ではないと思つたから、面の皮を厚くして筆をとつた。わつしよ／＼と御輿を擔いでゐる若人を見て、お祭騒ぎをする日本人の、その野蠻さを笑ふ人も有るが、彼等にとつては、この御輿擔が唯一の安全瓣なのである。吾々知識階級と誇つてゐる、偽善者どもには、彼等のこの純眞な境地が却つて羨ましく思はれないでもない。

世の中は、常にもがもな、渚漕ぐ、海士の小舟の網手可愛しも。

と、鎌倉右大臣源實朝は、北條氏の迫害に堪へかねて漁夫の穩氣な生活を羨んだではないか。

現代文化の、機械的生活に追ひ詰められて、窮理と喧噪と多憶とに疲れ果てた現代人の煩悶苦惱は、各人をして自暴自棄の社會主義に陥らしめるか、さもなければ發狂自殺より外に行き場のない様に思はしめる。これを悟つて何等かの安全地帯を求めようとすれば、まず藝術の世界に隠れるより外に途はあるまい。華やかで官能的な洋樂とか、感覺派の文學とか、未來派の繪畫とか種々様々な藝術も、一時の休憩所として慘酷な文明の嵐を避ける事は出来よう。併し、他を期待し、ひとりの道を外して行く者にとつて、それは決して永劫の安住地ではない。しからば現代の吾々は、如何なる安全地帯を求めたらよいのであらうか。

世人は茶の湯と言ふと、すぐ御隠居さんの慰みものかお嬢さんの嫁入り仕度の一つである位にしか考へてゐないのである。茶道とはそんなものではない。

茶道は道義的な、又禪學的な堅苦しい一面を具へてゐるが、他方面には、自然風物の愛より、茶器愛玩の藝術

的、風雅的な嗜好を多量に含んでゐるのである。それが爲、古來より國粹藝道の精華として、華道と並び吾が國固有の淳風良俗たる禮儀作法と合致して、婦女子は勿論武士町人の健全なる情操と、高雅な趣味とを養つて來たのである。自然を愛し、自然に親しむと云ふ事は、吾々人生にとつて缺くべからざる事實である。都會のビル街に、終日生活してゐるサラリーマンが、稀には郊外を散策すると云ふのも、自然の懷に一瞬でも抱かれたい爲であらう。

春は花に、夏は山に綠を探り、秋は紅葉に、冬は雪と自然の與へるまゝに、自然を觀賞するのも悪い事ではない。爛漫たる櫻の一枝を見るのも美しい事ではある。しかし、其の一枝に、一片の短冊がヒラ／＼してゐるのを見れば、誰れしもより高雅な風流味を味はふだらう。自然と行爲と合致したものを、吾々人間は理想とするのである。飴をしゃぶつて花見をする野暮漢はいざ知らず、上戸は酒杯に花瓣を浮かせ、下戸は花より團子と人生の快を叫ぶのを見れば、自然と人生のデリケートな關係を此處に發見するのである。人間は環境から作られ、逆に人間が環境を作るものである。云ひかへれば、人間は社會から作られ、逆に人間が社會を作るのである。

原始時代に、二人の間に行はれた他意なき食餌の分配と、母と子との間に行はるる無垢の諸法則、又個人としては、その母の乳房に縋る頃から食物に關する事は、最も密接なものであつた。故に、人間の文化は、食物を切りはなしては考へられない位である。人間は相手同士の間に存する諸法則の中で、何時しかその都合の好い部分だけが慣用せられ、それが習慣となり、これ等の習慣を基礎にして、多くの人々の都合の好いものだけが行はれ又それが習慣と成り、その習慣が洗練せられ、子供同士の交りが、青年同士の交りとなり。隣り同士の交りが漸次社會の交渉となつて、更に家庭の躰と、社會の仕來りが兩々相俟つて一種の作法が形作られたのである。しかしてその仕來りは、仕來りとして成長し、親から子に人から人に誨へられて來たものである。昔からこれを躰と云つて、子供が食膳に向つて、箸を持つ時分からの食事の仕方に初められ、漸次成長するに従つて、坐作進退を始とし物の言ひ方、家の出入の事に及び、聽て人中に出ての禮儀作法と成つたのである。であるから、食禮は民族的、國家的、或は地方的特色を持つ以上、吾々日本人は、純日本式食禮を心得なくては成らないのである。然るに洋食のエテイクフトなれば一通り心得てゐるが

と云ふ人々が、果して純日本式の食事法を心得へてゐるであらうか。「禮始食」と言つた孔子の言も、此の邊の事を意味してゐるのであらう。人間の秩序が言葉と作法によつて保たれて來た以上、その言葉と、作法とを探究する事の必要な事は、今更いふまでもない。されば吾が國民が數千年來保ち來たつた、その秩序の一要素たる獨特の作法を探究せずして、日本精神の妙諦を味はふ事が出來得るであらうか。

尤もこの正しい食禮を識り、好き嫌、好き作法を得るには、必ずしも茶道によらねば成らぬといふ譯けではないが、他の禮儀習修の様に無味乾燥でなく、健全なる情操と典雅なる趣味とをその慰藉としつゝ、茶道に携り、これに親しんでゐる内に何時とはなしに、その好影響に觸れて、これ等の諸目的を達成し得ることに成るのである。斯の如き淳厚淳美な茶道も、「近時形式に流れて來た」と、云はれるのは遺憾な事であるが、時代の變遷に従つて、其の時代に適應すべき茶道が生れた、と云ふ事は事實である。しかし昔も今も、和敬清寂の四題目を其の主眼として、斯道に精進して來た事は、日本文化史の物語つてゐる處である。和こそは茶道の眞生命であり、和なくば、茶道なしと云つても過言ではないのである。

和とは聖德太子の、十七條憲法の最初に「一曰以和爲貴」とあるのがそれで、平和第一を主義とするのは、古來日本の國民性なのである。

和は相對的に見て、他人と相和する意義があるばかりでなく、絶對的に見て、自分自身の心の平和をも意味するのである。茶の獨樂の平和は、即ちここに存する。決して形式的な堅苦しさに囚れ、珍器、名物をもつて點茶するのが吾々の言ふ茶道ではないのである。茶人と言へば誰でも知つてゐる千利休も、茶の湯とは、ただ湯をわかし茶をたてゝのむばかりなり、本を知るべし。

釜一つ持てば茶の湯はなるものを、よるすの道具好むつたな。

と言つたり、松平不昧公の「ただごと」の中にも、夫れ茶の湯は、東山慈照院の時、能阿彌、相阿彌等、台子の茶の湯を専らにし、誠に金銀をちりばめ、名器を集めて、榮耀の至極なりとぞ。其の後、珠光法師に至りては少々是を略す。然れども六疊敷に台子を飾り、珍器を集めて點茶ありとなり。台子の茶の湯は、結構を本とし少しも略儀を致すことなし、今いふ眞台子、皆これ能相の用ひし所なり。珠光以後、武野紹鷗、四疊半の座敷に袋棚といふ棚を飾り、大に略して點茶す。これよりして

紹鷗、利休相談にて、草庵佗の茶の湯を作り、専ら禪本の清規に本づき、白露地の本號と定む。これ茶の湯の根本なり。當世の茶の湯といふは、皆草庵の茶なり。然るを美をつくし結構を成すことに成りしは、にがくしき事なり。利久の靈魂も、なりはてたる茶のてい、さぞ口惜しく思はん、と察し入り候。是非もなき浮世と存するのみ。

と嘆き、更に奢侈に流るる茶會を非難して曰く、

人をもてなさんに、食物器物、天より下らず、地より湧かずと見れば、其の人々の程々に見合せ、塵末なきやうにあるべき事なり。家作は勿論、茶器食器に至るも、此の心得にて然るべし。然るを當世は、道具を見せに呼びながら道具御覽に御入あれと云はずして、茶の湯とて相招き、茶の湯は第二とし、客も道具を専らに譽め、主も亦、道具を自慢して、扱又懷石は、懷石の譯を知らぬ故、色々のことを思ひ付き、金銀を入れて、客を呼びながら、佗々と思ふこと、片腹痛きことなり。

世の人の笑ふ所、誠に感服の事なり。

と云つてゐる通り、そんなに形式的堅苦しさには囚はれるのが、茶道の精神ではないのである。どこまでも、和敬清寂の法則に従ひ、大自然の風味をそのまま茶碗に盛つ

て、自然の涼味を満喫する、風味こそ必要なのであるしかし、「人は道具を使ふ動物なり」と云ふ、西諺の言葉にもれず、昔から茶人は茶器を鑑賞し、多くの名物道具を作つたのである。嚴肅な茶道觀から見れば、此の玩物喪志の茶道は、茶道でなく、邪道であると云ふので、茶人の茶器愛玩を蔑視し、道具茶の湯として攻撃するのであるが、これはまた、一種道學者流の議論であつて、武士が魂とする刀を選定し、舟頭が水竿を選ぶ氣持とかはらないのである。それはかならずしも、日本に發達した茶道を、文化史の上から正視したものではないのである。

勤儉質素を主義とする、水戸家に於て、道具好な哀公は大變不評判であつたが、大正の御代に水戸家の財政を救つたのは、その哀公が道具好であつた爲に保有された諸道具の賣立てであつた。又尙武勤儉を主義とする島津家でも幕末及び、維新の當初に同家に入つた名物茶器が近年同家入札の際に、最高價を呼んだのである。道具好き、骨董いじりが家を滅すとのみきめつけてゐた、儒者一流の議論に對して、痛快な皮肉ではないか。

しかるに世人の毀茶論をきくに、大なる原因は徳川幕府が、自家擁護の爲に奨勵した漢學により、それを學ぶ

ものをして、遂に支那崇拜者を續出せしめ、何事によらず支那流に解釋せんと企圖し、支那思想を以て我が事を觀、もし割り切れぬ問題に逢着する毎に、これを排斥しこれを非難せんとする傾向を持つに至つた事である。又それと同様に、近代西洋文明の輸入と共に、西洋崇拜者が、出で（自由）の旗印を上げて、支那思想輸入以來、日本精神を源流とする、國學及びその思想的産物に對して罵言讒侮を恣しむにしたと同じ様に、質實な純日本の淳厚淳美の茶道を排斥したのである。又古來學者の眼から見て、茶道は遊戯の部に入れられ、圍碁や將棋と同列にし、單に遊び道具に過ぎないものとして、取扱はれて來た事も原因してゐる。それ等は、茶人即ち點茶人、宗匠連が所謂茶人文盲で、少しも學問をしないから、點茶法の傳授にのみ拘泥して、遊び事、戯れ事の實演をやつて來たからであるとも云はれてゐる。そこで儒者、道學者の勤儉論、道德説から見て、茶道は奢侈的、亡國的遊戯であると罵倒されてしまつたのである。現代人が茶道を解しないのは、この事が深く頭腦に滲み込んでゐる爲ではないだらうか。

茶道は古來の學者が喝破せる如く、亡國的遊戯で有らうか、何も得る處のない有暇人の徒然の慰みものであら

うか。

小堀遠洲公書捨文には次のやうにある。

夫れ茶の湯とて外にはなく、君父に忠孝をつくし、家々の業懈怠なく、殊に舊友の交をうしなふ事なかれ。春は霞、夏は青葉がくれのほととぎす、秋はいとど寂さまさる夕の空、冬は雪の曉、いづれも茶の湯の風情ぞかし。

道具とても、珍らしきによる可らず。名物とて、かはりたる事なし。古きとて、其のむかし新し。ただ家に久しく傳はりたる道具こそ名物なれ。古きとて、ただ賤しきを用ひず、新しきとて形よろしきは捨つべからず。數多きことを羨まず、少きをいとはず、一品の道具たりとも、幾度ももてはやしてこそ、末々子孫迄も傳はる道あるべし。一飯を進むとも、心ざし厚く、多味なりとも主たるものの志うすき時は、早瀬の鮎、水底の鯉、とても味ひあるべからず。籬の露、山路のつたかづら、明暮れ來ぬ人をまつ幕風の釜の釜にえ音たゆることなかれ。

松平不味公もこれに倣つて、

茶の湯は稻葉に置ける朝露のごとく、枯野に咲けるなでしこのやうにありたく候。

と云つてゐる。これが眞の茶道精神である。又次のやうな面白い話もある。

太閤が餘り茶に凝つて、政治を疎かにされるのはよくないと云ふので、加藤清正が、千利休を殺さうと思ひ、竊に茶室を窺つて見たが、利休が囊を取れば、左の防ぎとなり、茶杓を取れば右の柄となり、何處からも切り込めなかつたので、大いに感心して、利休の弟子に成つたと云ふ話がある。これは勿論作り話であらうけれど茶道の極致に達すれば此のやうに、人格、精神の陶冶に成るのである。

又僧榮西は、入唐して茶の種も彼土から携へ來り、茶の民衆化を企てた、功勞ある人であるが、その榮西が再度入唐して歸つて來た當時、時の將軍が病魔に侵され、榮西に加持を命じたが、榮西は良藥であると云つて一種の茶と、喫茶養生記と云ふ書を將軍に獻じた。將軍はその茶を召して大變御感悅であつたとか。

其の喫茶養生記の中に、
茶ハ也養生之仙藥也。延齡之妙術也。山谷生ハ之其地神靈也。人倫探シ之其人長命也。天竺唐土同貴ニ重ニ之と記し、又其の中に、

五味（鹹、甘、酸、辛、苦）を五行（地、水、火、風、空）に配し、五臟（肝、肺、心、脾、腎）に配し、心臓は苦味を司る故に、人々苦味の不足から、不健康に成る

と斷じ、

日本國不レ食ニ苦味一乎。但大國獨喫レ茶。故心臓無レ病。亦長命也。我國多有ニ病瘠人一。是不レ喫レ茶之所レ致也。と云ひ、喫茶法として、

喫茶法、極熱湯服レ之、方方匙ニ二三匙一、多少隨意、但湯少爲レ好、其亦隨意、云々。殊以レ濃藏レ美、飯酒人後喫レ茶、則消レ食也。と説いてゐる。

日本人が、食事の後に茶を飲むのは、所謂食物の毒を消す爲である。

之等の事實を見ても、茶道の歴史は古いものなのであつて、決して遊戯や、娛樂としてあつかつては成らぬものであり、其の奥の深さは計り知れないのである。

世人が茶の湯の非を説くのを聞けば、一理あることを云ふ。しかし皆眞の茶道精神を知らないで、天婦羅された茶の湯を見てゐるからである。利休「茶の湯百首」の中にも

其の道に入らんと思ふ心こそ、我が身ながらの師匠なりけむ。

習ひつゝ見てこそ習へ習はずに、善悪いふは愚なりけれ。

と説いてゐるではないか。

特に最近では、此の超非常時に青年婦女子が、そのやうな消極的遊戯に榮々としてゐてよいのかと罵詈されるかも知れない。しかし、その言葉は間違つてゐる。茶道の始原が、元龜、天正の戰國時代に發生した理由を檢討して見るに、殺伐に流れる人の心に潤を與へ、血ばしつた眼に、一滴の目薬を與へるには、心の糧、精神の再陶冶こそ必要なのであつた。

ネヅミの音を、敵の足音ではないかと疑り、水鳥の飛び立つ音に、敵來れりと、思ふ心の淺間しさ、どこに心のゆとり、心の潤を見出すことが出來やう。

彼の英雄秀吉が、千利休を寵愛したと云ふ事實は、彼が天下を平定した後の、慰めの爲の茶道でなく、戰時下に己の心、又家臣の心の落付きと、ゆとりを取り戻さんとした事によるのである。秀吉が戰場に臨む時、何時も利休を供に連れて行つたとか、殺伐な人の命のやり取りに、疲れ果てた人々の眼に、旅簞笥をさげた、佗々とした利休の姿を、どのやうな目で彼等は見たであらうか。秀吉のこの心あつてこそ、彼は天下を平定したのである。彼は決して武略に長じた武人であつたからでもなく、運命に支配された幸運兒でもなかつたのである。

自分の淺い經驗ではあるが、終日氣持のイラ／＼した

日でも、茶事を終へて家路につくときの心は、何か良い事をした後の、良心的満足の、その心と同じやうな感じをばつきりと自覺されるのである。此の心こそ精神の潤ではないだらうか。何も薄暗い室で、甘くもない茶をすすり、煩瑣な世間を度外視して、自己だけの安住を得て得々とするのが茶道ではない。茶道とはもつと大乘的素質を持つてゐるのである。決して女子のしとやかさを望むものでもなく、粹な優男のするものでもない。萬人が心の糧を得たいと慾求するものが來る處であり、學ぶべきものなのである。

現代文明の煩瑣な生活と、非常時の波に泳ぎ疲れて神經衰弱にまで追ひ詰められた吾々が、茶道に安全地帯を得やうとする慾求は、自ら「寂詩人」としての西行、芭蕉、若しくは「寂の茶人」としての、千利休を回顧せしめるのである。

